

15歳 進学のため上京する  
20歳 文芸雑誌で詩壇デビュー  
22歳 父が他界し、家長となる  
37歳 詩集出版で詩壇復帰

vol. 15

## 野口 雨情

▶▶▶ Noguchi Ujyo

### 言葉の音楽で、子どもたちに 温かな心を育もうとした 童謡詩人

#### ▶▶▶ 名家に生まれるも、父亡き後は混迷の日々

幼い頃、誰しも口ずさんだことがあるだろう童謡『赤とんぼ』『シャボン玉』『七つの子』『赤い靴』『証城寺の狸囃子』。これらを作詞した野口雨情（本名：英吉）は、1882年（明治15年）、現在の茨城県北茨城市にあたる地で生まれた。太平洋に面した生家はかつて水戸徳川家藩主の御休息所を任された名家であり、廻船業を営む雨情の父は村長も務める地元の名士だった。

雨情は小学校を卒業すると、衆議院議員である伯父の家に下宿し、東京の中学校に通うようになる。そこで俳句を作ることを覚えた雨情は、文学を学ぼうと中学卒業後、早稲田大学の前身にあたる学校に入学する。イギリス文学を教えていた坪内逍遙の講義に感銘を受け、雨情は人は如何に生きるべきかを追求するようになる。文芸雑誌に寄稿し、詩壇デビューを果たしたのは20歳の時。だが、ほどなくして中退してしまう。自らの進むべき道がわかり、もはや通学の必要性を感じなくなったからだという。方向性が定まり創作活動を始めた矢先、悲しい知らせが届く。父が他界したのだ。しかも、事業の失敗による多額の借金を残して…。

長男だった雨情は、帰郷し家長となった。借金を返すため、先祖代々受け継いできた山林や田畑を売った。好きな女性との結婚が叶わぬまま、世話人に紹介された山林地主の娘としぶしぶ結婚した。第一子が生まれた後は、北海道へ渡ったり上京したりしながら、新聞記者や編集者として働いた。その間、仲間とともに創作活動も続けた。



1882年、茨城県生まれの童謡詩人、民謡歌人。『青い眼の人形』『兎のダンス』といった童謡だけでなく、全国各地のご当地民謡や学校の校歌の作詞、教育に関する論文など著作物も数多く遺している。

#### ▶▶▶ 63年間の生涯で2000余りの詩を創作

母の死去をきっかけに30歳で再び郷里へ帰ると、植林や山林の管理を行うだけでなく、地元の消防団や漁業組合に所属するなど公職も務めた。その後の数年間は、離婚したり、炭坑事務所で働いたり、再婚して水戸へ移り住んだり、公私ともに変化の激しい時を過ごす。

38歳で東京へ引っ越すと、童謡童話雑誌を刊行する出版社で編集の仕事に就いた。その前年に出版した詩集は、詩壇からしばらく遠ざかっていた雨情にとって、本格復帰と言えるものだった。同じ頃に作詞した『枯れすすき』は作曲家に依頼して曲をつけた。この歌は後に『船頭小唄』とタイトルを改め、大ヒットすることとなる。

以降、雨情の創作活動は絶え間なく、かつ精力的に続けられた。61歳の時、脳出血で倒れ、63歳で亡くなるまでに、童謡をはじめ全国の民謡や校歌など2000余りの詩を創ったと聞けば、その熱量が伝わってくる。

雨情にとって「詩とは言葉の音楽」だった。幼い子どもにもわかるよう、やさしい言葉で書かれた詩には、温かな心を育んでほしいという願いが込められている。全国各地はもとより満州、朝鮮、台湾にまで足を運んで講演し、童謡の普及に努めた。45歳の時に発表した論文『童謡と児童の教育』の一節には、その考えが記されている。

童謡は児童の精神生活を指導し、彼等をして一個の人格者にまで円満に生育せしむる力となるものでなければなりません。

雨情の思いは現代にも引き継がれている、と信じたい。

（執筆／ライター 篠田 りょうこ）